The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	久保之取蛇尾　後篇　解説
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1956, 17, p. 30-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68498
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

久保之取蛇尾　後篇　解説

天明四年秋刊行の「久保之取蛇尾」（くぼのすさみ）の巻尾に「次巻近刻」とある。久保之取蛇尾後篇は、その次巻に相当するものと思はれる。写本で伝はつてゐて、未刊である。原本は金沢の旧四高図書館に蔵せられてゐたといふ。それを昭和十九年七月鈴鹿三七氏が原稿紙に謄写しておかれた。その謄写本を借りて、活字に附するのである。原本は上下二冊の本で、上冊は墨付三十四枚、下冊は墨付二十九枚だつたといふ。刊本久保之取蛇尾は考証的随筆である。その続篇である本書もまた考証的随筆である。著者は入江昌喜。昌喜（まさよし）は、俗称榎並屋半次郎、大阪石灰町の商人である。昌喜は名、号を長輔といふ。また晩年西高津に隠棲して、斎を幽遠窟といつた。享保七年六月二十一日の生れ、三才にして父に死別し二十四才また兄を失ふ。よつて家業を嗣いだ。五十才より隠居して学者生活に入つたが、天明四年六十三才の時、養嗣子昌久が歿したので、再び家業を見て七十才に及ぶ。その後、再び幽遠窟にかくれ、著述生活に入り、寛政十二年、七十九才の八月十二日に歿した。久保之取蛇尾は再度家業を見る年の出版であつて、彼の生涯にとつては劃期的意味をもつものであつた。昌喜は大阪の町人学者を代表する一人である。友に江田世恭あり、小沢芦庵がある。昌喜には定まつた師匠がない。契沖に傾倒してその説に教へられるところが多かつたやうであるが、契沖に入門したのではない。入門すべく時代が後すぎるのである。その著述には、幽遠随筆、久保之取蛇尾、春雨茗談等の随筆的著作のほかに、名目分類抄、青陽唱詁、竹取物語抄の訂補、万葉類葉抄補闕、土佐日記抄註等がある。いづれも語義考証に主点を置いたもので、先人の著述を補訂する体裁のものが多い。

昭和十九年五月、昌喜の一族たる小寺元次郎氏を中心に森繁夫氏ら数人相寄つて入江昌喜事蹟顕彰会を設立し、昌喜の伝記を編纂しかつその事蹟を顕彰せんとした。「入江昌喜翁」と題する小冊子は、すなはちその事業の一であつた。その後、森繁夫氏は鈴鹿三七氏と相はかり、未刊の昌喜の代表的著述たる久保之取蛇尾後篇をこの会から出版しようとした。よつて鈴鹿氏はその謄写本を作り、既に一部は文選を了したのであるが、戦火のためつひに出版の機を失し今日に至つてゐる。森、鈴鹿の両氏は学生時代よりわが知遇を得てゐる先輩である。今、鈴鹿氏の許可を得て、その草稿を譲り受け、ここにこの未刊書の翻刻を企図し、両先輩の志を継ぐ次第である。校訂のことは田中裕氏が責任を以て当つてくれた。わたくしたちは、一度その原本を見たいと思つた。金沢大学の窪田敏夫教授はわれわれの願ひを容れて特別に調査して下されたが、その原本の所在は今は不明である。止むなく、われわれは鈴鹿氏の謄写本を唯一の頼りにそのまま版にすることにした。

翻刻に当り、鈴鹿、窪田両氏をはじめ関係諸氏の好意と御援助とを拝謝し、森氏の遺志を継ぎ得たことを喜び、故人の霊にこの書を捧げる。（昭和三十一年五月二十六日、小島吉雄しるす）